

山武杉で「木と土の家」づくり

地元工務店等11社が結集

10月27日、千葉県山武市の文化会館一のぎくプラザ・視聴覚室一でLTP(有限責任事業組合)グループ「木と土の家」の設立・事業説明会が開催された。

同グループは地元の「山武杉」を使って地産地消、環境共生の家づくりを目指す木材、林業、建築業者11社の集団。会長の石井充氏(石井工業代表取締役)の挨拶



の後、同グループのアドバイザー稗田忠弘氏(稗田総合建築設計事務所)が地域を豊かにする「木と土の家」づくりを説明。一坪当たり一皿約三六石(以上とふんだんに木を使い、接合金物や筋交



を使わない、天井も張らない伝統工法での家づくり、内部仕上げには珪藻土。ま

た間取りの工夫、オープンスペース、換気のための越屋根などでエアコンを使わない家づくり。冬は木片ペレットを使う薪ストーブによる暖房が自慢だ。

地元の材料と職人の仕事を増やすことで地元にお金を循環させたい。地域循環の仕組みの中で「なりわい」を成り立たせたいという。

「山武杉」は色が黒いなど見かけは悪いが、赤身が多く強度もあり建具材として「秋田杉」より高い評価を受けてきた。油脂分が多いため外壁仕上げ材に塗装なしで使っても厚ぼけていくという。

年間20棟を目標
同会ではメンバー十一

業界短信

社が年間各2棟ずつ、計22棟以上を目指すという。今後、地元ユーザーへの、PRと地元自治体との連携も重要だ。

(阿部)

「2000年住宅
はとつくの昔に
つくっている」

NPO 幸せな家庭環境をつくる会は10月27日、



埼玉・東松山市において全日本住宅環境連盟秋季わくわく研修会を実施。環境工学博士の富田辰雄氏(ホーミースタディグループ会主)を講師に招きセミナーを開講した。

富田氏は、政府の提唱する2000年住宅について「2000年住宅などは、昔の大工がとつくとつくっている。建築技術が進歩している現代で、その気になれば2000年住宅などはラクにできるはず。出来ないのは家が壊れるのではなく住む人の都合で壊れているだけ。ハウスメーカーを儲けさせるために家を壊しているだけで、住む人のために建てているわけではない。こんな風潮だから、家を利用する年数が実質

18年しかない。こうした点を見直し、住宅の本質を理解せずに、2000年住宅を論ずることはできない家を利用する年数が実質18年しかないのは、」と語った。